

はじめに

本書を読み進められる読者に、あらかじめお断りしておきたい。

本書は「マラッカ海峡物語」と題しているが、小説のようなフィクションではなく、史実に基づく歴史の書である。ではなぜ「物語」なのか。評伝であれ通史であれ、歴史叙述は「語り」、「ナラティブ」だと私は思う。だから、初期の拙著も『マドラス物語——海道のインド文化誌』と題した。物語としての叙述は、南インドから始まって、東南アジアを経て、日本へとたどり着くはずだが、今はその中間点のテーマを語っている。

本書の主題は「マラッカ海峡」だが、その舞台はマラッカという港市ではない。マラッカ海峡の北半とベンガル湾を中心に据えて、インドー東南アジアー東アジア一帯のヒトとモノと文化をつなぐ場としてのペナンをテーマにしている。

さて、ごく素朴な疑問から本書の意図を記したいと思う。

東南アジアの海峡の、その北端にある小島に、なぜ大英帝国の先駆けとなるイギリス東イン

ド会社が居留地を設けたのだろうか。その契機は何であったのだろうか。

本書の主題となるマラッカ「海峡」とはどのような空間であったのか。海峡とは陸地と陸地に挟まれた狭い水域である。それは海陸をつなぎ大小の船が行き交うにぎやかな小径こみちであり、回廊でもあった。東南アジアと南アジアの境域にあるマラッカ海峡もその一つであろう。その規模については、海峡の南北端をどことするかによって多少のずれはあるが、南北ほぼ八〇〇〜九〇〇km、東西約四〇〜三五〇kmの大海水経路である。

世界の海峡の中でも、ホルムズやボスポラス、ドーバー、ダーダネルスといった海峡とは違って、マラッカ海峡は歴史上の舞台に華々しく登場することはほとんどなかった。それは、海峡とその周辺の国家やさまざまな民族（エスニック）による事件が、世界の歴史に激動をもたらすほどの重大事ではなかったからと考えることもできよう。しかしまた、さまざまな民族に属する人々が、彼らの間で折り合いをつけながらこの海域を往還し、対立しつつも共存し、結合しつつ分裂を回避してきた生存の知恵があったことが、世界史上に重大事を生じさせなかったとも考えられる。

日本では、「海峡」という言葉は、史実・伝承・説話・文学を問わず、ある種の抒情性しよじょうせいを帯びることが多い。それは間宮（韃靼だたん）、津軽、関門、対馬……いずれの海峡にも共通する。

ひるがえって、海峡を生活の場とするインド・東南アジアの人々にとって、「海峡」とはいったいどのように認識され、生活空間としてどのように利用されてきたのだろうか。

函館・下北半島・瀬戸内海諸島・長崎・壱岐^{いさ}対馬・沖繩諸島……、海峡をたどる調査の中で私にはこうした単純な疑問がずっと付きまわっていた。

ベンガル湾海域の調査を始めたきっかけは、一九七〇年八月、海の全く見えない南インド内陸部の小村での出来事であった。それは、マレー半島への移民経験を持ち、片言の日本語を話す自作農との出会いである。さほど貧しくもない中農で、カースト間の大きな紛争もほとんではない農村から、なぜ人々は東南アジアへしばしば船出するのか。

一九八五年から、私は南インドのマドラス（チェンナイ）を振り出しに、ベンガル湾沿いに海港伝いで北上し、さらにベンガル湾の北に位置するカルカッタ（コルカタ）を経由して、バングラデシュ、ミャンマー南部、タイ南部、マレー半島の東西と、ベンガル湾の沿岸をほぼ一筆書きのように断続的にたどってきた。その後二〇〇一年からは、シンガポールとタイを基点にマラッカ海峡を上下して、スマトラ島とジャワ島の主だった港市も訪ね歩いた。

この一連の調査行の問題関心もいたって単純である。ベンガル湾海域を内懐のように抱えるインドと東南アジアには、いったいどのような文明が形成されたのか、この海域を渡った人々は、どのような動機を持ってどこからやってきたのか。そして彼らの子孫はどのような生活を送っていたのか……。

それがインドの内陸農村で抱いていた疑問とシンクロする。

本書はこれまで二〇年間にわたって断続的に行ってきた海峡フィールドワークの一部である。この現地調査と文献資料をもとに『マラッカ海峡のコスモポリス ペナン』(二〇一二)を上梓し、南アジア・東南アジアの教科書として二〇〇人ほどの受講生に講義した。だが、もう一つ興味は持たれず、むしろ拙著を目にした一般読者や、東南アジアやアルメニアに関心を持つ旅行者の間で、歴史ガイドとして重宝されたという。もともと、刊行後に気づいたのだが、記述内容には誤記や資料の誤読もあって、著者としては全く納得のゆくものではなかった。そこで、資料を読み直したうえで内容を全面的に書き直し、改めて一般書として書きおろしたものが本書である。

旅行ガイドを除けば、ベンガル湾やマラッカ海峡の歴史や社会に関する専門書、概説書は思いのほか少ない。その中でも、本書のテーマに関わる好著は、『大航海時代の東南アジア』(1950、1980年I・II)(二〇〇二)、『マラッカ物語』(一九八一)、『東南アジアの港市世界』(二〇〇四)、『海域イスラーム社会の歴史』(二〇〇三)などである。しかし、それらが対象とする時代は、主に一五〜一八世紀であり、本書はむしろその後の時代に関心を置いている。また、歴史の舞台も主としてマラッカ海峡の南、ジャワ海から南シナ海に接続する島嶼世界であり、マラッカ王国とその関連史実に関する研究がもっぱらである。本書が対象とするマラッカ海峡の北部、アンダマン海、ベンガル湾に及ぶ海域世界についてはほとんど研究がなかった。

これまでほとんど語られてこなかった、マラッカ海峡の北端に浮かぶ小島ペナン、その一画に位置する小世界ジョージタウン、そしてそれらを包摂するベンガル湾。その一八〇二〇世紀を描くことによって、当時のアジアと西欧の縮図が見えてくるのではないかと考えた。

数多くの民族による域圏交易や華僑によるアヘン・錫の利権を巡る競合と和合、少なくとも四度にわたる大火とマラリアなどの疫病、械闘と呼ばれる華人集団間の武力紛争、さらにはマレー系やインド系の人々も巻き込んだ大抗争……これらの試練を経つつも、今日まで緩やかな共存と棲み分けを行ってきた小島ペナンとはどのような社会であったか。価値観や生活・経済の様式が異なる人々が対立を繰り返しつつも、多元的なエスニック間の「融合的な生活様式」を生み出してきた異文化集団の知恵をこの海域と小島から読み取れるのではないかと考え始めている。

なお、本書では原則として以下の用語・表記を使うことにする。

1 地名・国名などはその時代の表記に従い、現代表記を（ ）で記す。たとえば、カルカッタ（コルカタ）、ビルマ（ミャンマー）、マドラス（チェンナイ）など。

2 本書で登場する社会集団については、基本的には各集団の自称に従う。これまで一般に使われてきた「種族」「民族」には多様な概念が含まれていて混乱がある。本書では、広義には「民族（ネーション）」を使うが、基本的にはエスニックという意味合いで「民族」という

用語を使う。日本では、今もなお「エスニック」は、料理や衣裳、風習や慣行など、東南アジアや南アジア、西アジアに対するエキゾティシズムの意味合いで理解されることがあるが、それは違う。本来の「エスニック」は、アジアに限らず、世界の諸地域で、それぞれ独自の血縁や出自、規範や伝統、風習や文化などを共有する社会集団を意味するはずである。

3 インド史の史料用語としてこれまで「管区 (Presidency)」が一般的であったが、「総督府」がむしろ歴史上の実態に近いと考えるので本書ではこの用語を使用する。

4 巻末の「略史」は主として以下の資料をもとにして著者が作成した。

- 『ペナン史』(一九六六)
- 『王立アジア協会誌・マレーシア』(一九七七、二〇〇九)
- 『東インド会社とペナン』(二〇〇九)
- 『ペナンとインド洋』(二〇一一)
- 『近代日本総合年表』(二〇〇一) 岩波書店
- 『日本史年表』(二〇一七) 岩波書店
- 『日本史年表・地図』(二〇一六) 吉川弘文館
- 『新版 南アジアを知る事典』(二〇一二) 平凡社

目次

はじめに

3

第I部 海峡の植民地ペナン

19

序章 海峡を掘り起こす

21

海の回廊／ペナンとインド洋／ベンガル湾海域の東西／

インド東岸縦断ルートはなぜ発達しなかったか／

代替ルート、バッキンガム運河／ベンガル湾海域とマラッカ海峡／

マラッカ海峡の南北

コラム マラッカ海峡とモンスーン

第1章 租界・居留地・ジョージタウン

租借地・セツトゥルメント／租借地の獲得／上海租界／

「上海土地章程」と租界／増幅する租界／恩准と和親／租界と華界／

神戸居留地／神戸居留地の特徴／上海工部局／神戸行事局／

ペナンの工部局 PWD／ペナン・ジョージタウン

コラム 史伝と文学

第2章 海峡とモンスーン

モンスーンと交易海路／ペナン島の水／

ファクアールの上水プロジェクト／モンスーンとペナンの植生／

ビンロウと呼ばれた島／儀礼・嗜好品のビンロウ／

圏域交易品のビンロウ／グラハムのペナン農業政策／

ライトのコシヨウ経営構想／「大陸封鎖令」とコシヨウ農園の失敗／

ペナン軍港構想／ナポレオン戦争とペナン／
マラッカ海峡の要塞／要塞と海洋戦略

コラム 水と租借地

第3章 海民と開拓者

海民・海商という集団／ベンガル湾の海商たち／

マラッカ海峡の海民・海商たち／ペナンと海民アチェ／

海民ブギスとミナンカバウ／アラブの海商ハドラーミー／

「無主の地」から東インド会社領へ／到来するさまざまな民族集団／

ペナン島開拓の先達たち／フランシス・ライトの植民地開拓／

ペナン上陸／ウイリアム・ライトと庭園都市アデレード／

ペナン島、開拓前夜／ペナン総督府の植民地行政

フィルムピオン (peon)

第4章 居留地ジョージタウン誕生

ジョージタウンとは／海商の風待ち場から定住の地へ／
流刑の島ペナン／流刑囚、租借地を築く／海峡の防人たち／
新客集団／年季契約移民とクーリー／幫と公祠／
宗難を逃れるポルトガル人／フランス・カトリック教徒への温情／
ユーラシア人の安息地／アチエ村のアルメニア人

コラム ペナンのMEEP

第5章 居留地ペナンの誕生

「査定者委員会」の設置／「二一カ条の提言」／居留地構想／
ペナン島ジョージタウン市／「間口税」／「道路委員会」／
「道路税」／一九世紀ペナンの通貨／ペナン市の歳入と歳出／
居留地のインフラ整備／ダンダスの居留地改革／
一八〇五年の市街調査と治安維持

第Ⅱ部 海峡を渡ってきた人々

第6章 変貌するペナン

民族ごとの「役割・分業」／居留地の分布／
初期の居留地——マレー村落から居留地へ／
中期の居留地——拡大する華僑・インド系移民の居住地／
後期の居留地——結社・会館の増大／華僑の会館・結社／
多様な街路名／インド系移民の流入／抗争と統制

153

第7章 シントラ、ポルトガル人街から日本人街へ

ポルトガル人街シントラ／日本人街シントラ／
『南洋の五十年』の彼南／彼南市のパイオニア／
南洋進出の日本企業とペナン／ペナン在住日本人の記録／
明治期ペナンの実像／彼南日本人会／昭和期ペナン在留邦人の活動／

167

151

日本人会の慈善活動／日本人会と廢娼運動／墓碑銘の日本人

コラム 昭南と彼南

第8章 マラッカ海峡のアルメニア社会

アジアの海へ／アルシヤク号事件／

イギリス東インド会社とアルメニア海商／アルメニア海商の拠点／

アルメニア通り／ペナンのアルメニア人コミュニティ／

アルメニア海商の「鞆取り商法」／砂金・アヘン・スオウ／

モウゼ商会・アンチモン・ブルック王国／

蒸気船・海底電信・国際保険／国際海運業とアンソニー商会／

名門ホテルとサーキーズ兄弟／アジアの海のホテルチェーン

第9章 華人街の頭目

アルメニア通りの華人秘密結社／「無法都市」ジョージタウン／

ペナン統治と華人カピタン／カピタン・会党・秘密結社／
華人名士たち／初代華人カピタン／農園主・アヘン請負業・太平局紳／
初代太平局紳、胡泰興／中国の開明的保守派、辜鴻銘／
海峡北部の沿岸交易商、許泗漳／張理伝承と大伯公信仰／
大伯公会の会党首領／秘密結社海山会とラルート械闘／
清朝官僚からカピタン・チナへ／異彩の客家起業家、張弼士／
アメリカ帰りの新来華僑／崩れる相互依存関係

コラム ペナンの孫文

第10章 ベンガル湾を渡ったインド人

ペナンのインド人街／クリンと呼ばれた人々／
南インドの富裕商チエツテイ／日本人が見た「チツテ」／
内陸巡回商人チエツテイ／タミル・ムスリムの海商チュリア／
チュリアの名族、マラツカイヤール／カピタン・クリン／

富商カーディル・ムハディーン／ペナンのモスク群／

ナグール廟の海域ネットワーク／ムルガン神とチエツテイ商人／

チエツテイと「寺院講」

コラム サンガムと会党

おわりに

文献リスト

マラッカ海峡・ペナン島・ベンガル湾略史（1750～1910）

293

278

273